動物に関わる仕事の難しさ

動物応用科学科 4 年 鈴木大志

自分は小学校の生き物係あたりから「動物が好きだから、動物系の仕事に就きたいなぁ」と楽天的に考えながら生きてきた。しかし、そんな楽天的な考えはすぐに打ち砕かれることになった。

大学１、２年生のとき、牧場実習があった。この牧場実習で衝撃的だったのが角焼きである。角焼きとは牛に角が生えると危険なので子牛のうちに角の根元を焼き、生えなくしてしまうというものである。熱くなったコテを子牛の生えかけの角の根元に押し付け肉を焼く。もちろん子牛は必死に抵抗する。それを学生がおこなったのだが、すること自体が嫌だったし、それを笑顔で見ている牧場主の方を見たときにとても不快な気持ちになった。他にも搾乳の際に尻尾が邪魔という理由で断尾を行うなど、嫌な気持ちになることが多かった。もちろんその恩恵を受けているのは理解している。しかし家畜を愛しながら商売道具としてみなければならないことを難しいものだと思った。

大学３年生のとき、インターンシップで検疫所で仕事をさせてもらった。そこで見たのが実験用の動物である。実験用の動物の扱いは本当にひどいものがあった。特に豚だ。驚くほど雑に扱われていた。豚たちの生活する空間は糞や尿、こぼれたエサでドロドロだったし、豚も乱暴に扱われていた。細かくは覚えていないが、食べたものによる腸の成長の違いを測定するために数十匹の豚を解剖するという仕事があった。豚を飼育スペースから連れてきて、電気ショックで殺す。殺した豚の腸だけ取り出し後は廃棄する。これをまた笑いながら行う。ここで感じた不快感を書くと長くなってしまうので省略するが、「動物に関する仕事」に対する考えを一変させられた出来事だった。もちろん検疫所といってもさまざまな仕事があり、これはその中のほんの一例に過ぎないことも、検疫所は日本にとってとても重要なものであることも理解している。

研究を進め、野生動物学の研究者について知っていく中でもやはり難しい職業だと思わされた。当たり前だが、ただの動物好きと研究者との間には驚くほどの溝を感じる。もちろん対象に対する興味関心を持ち続ける能力や、時間や労力を惜しまないという覚悟がまるで違うのだが、考え方の違いも大きく感じる。研究者は動物を好きでありながらも、研究対象としてクールに観察する必要がある。時には命を奪わなくてはいけないかもしれないし、助けられる命を助けないという選択を下すかもしれない。

研究は星の数ほどあり、研究者も数多くいるので自分の見たことのある研究者は氷山の一角にもならない程度でしかないと思うが、自分には難しい職業だと考えさせられた。

自分は、上記の仕事やその態度を批判するつもりはない。ただ、体験して観察していく中で不快に思っただけであり、ただの動物が好きなだけでは務まらないと感じただけである。批判には責任が伴わなければならない。「では、どうしたらいいか」を提案しない批判には重みがないと思う。その責任を負ってまで批判するほど立派な考えは持っていない。ただ、自分は動物を傷つけることに強い抵抗を感じるし、直接手を下すことは恐らくできない。深い倫理観があるわけではなく、可哀想と感じるだけである。情けないと思われるかもしれないが、傷つけるのは可哀想だという考えを捨てられない自分には動物に直接的かつ深く関わる多くの仕事には向いていないのだと感じた。